

## 第二十章 戦車ハリー・マウス

まん丸になったトゲトゲのハリネズミを連想させる不思議な球体が宇宙戦艦の浮遊立体スクリーンに映し出される。

「イリの予感、的中か！」

榊が手を打つ。宇宙戦艦の中央コンピュータの解説を待たずに今度は拳を握る。

「あれは？」

ウクライナー共和国ドック州の戦場でロシア兵が両手を頭の後ろに疲れたような足取りで歩いている。イエロー・タイガーの強力な破壊力にロシア兵はなすすべもなかった。しかし、後方からジープに乗ったロシア軍将校が拳銃を空に向けて撃ちながら追いかけてくる。

「戦え！ 戦列を離れた者は死刑だ！」

距離が詰まると最後尾の兵士に発砲する。背中から撃たれればどうしようがない。兵士はイエロー・タイガーが何とかするのはないかと期待する。イエロー・タイガーの砲塔の連装機関銃がジープを捕らえようとするが兵士が邪魔になってジープに照準を合わせられない。

次は自分かもしれないと何人かの兵士は捨てた銃を拾うと振り向いて射撃する。次々と同調する兵士が増える。

「裏切り者！」

将校の強気の言葉もそれまでだった。なんとかジープをＵターンさせて将校は命からがら離れていく。射撃した兵士は銃を投げ捨てる。と投降の隊列に戻る。

\*

投降したソシア軍の兵士に悲壮感はなくむしろ晴れ晴れとしている。なかには笑みをこぼす者もいてイエロー・タイガーについていく。一方、イエロー・タイガーの砲身はまっすぐ大空に向かっていている。

地平線が三六〇度広がっているウクライナー共和国の大地はまるで大海原のようだ。紺碧の海の色ではなく小麦色と真っ青な空。まさしく国旗の色と同じだ。

その大空から違和感のある音がする。よく見ると遙か遠方に黒い点が何個か見える。ソシア軍の大型爆撃機が編隊を組んで向かってくる。なぜイエロー・タイガーの砲塔が大空に向かっていたかの理由が判明する。

爆撃機を護衛する戦闘機がイエロー・タイガーに迫るとソシア兵の一人が叫ぶ。

「おれたちを殺しに来たんだ」

普通なら「助けに来た」と喜びそうなものだがそう思う者は皆無だった。ソシア兵はプチレンコン大統領を信用していない。これでは戦争に勝てるはずがない。

数が多すぎる。イエロー・タイガーと言えどもたった一両で防げないかもしれない。まして

投降したソシア兵を守ることは不可能だろう。そのとき上空に銀色に輝くトゲトゲの球体が現れる。もちろん宇宙戦艦のかなり下方だが、第一発見者の榊が言うとおりのハリネズミが丸まっているように見える。一分の隙もない完全な球体をしている。

「何が起きる？」

イリも榊も加藤も浮遊立体透過スクリーンを見つめる。いつの間にか球体からあらゆる方向に無数の鋭いトゲが出ている。コバルト・カウの角が伸びるようにこのトゲも伸びるのだろうか。次の瞬間目映い閃光が大空に向かう。トゲが伸びたのかトゲの先から極細のレーザー光線が発射されたのかは識別できない。

次の瞬間すべての爆撃機と戦闘機が銀色に輝く。青い空に淡く虹色に輝く小さな雲が現れる。その数は爆撃機と戦闘機の数と同じだった。もし夜であれば花火のように見えたかもしれない。犠牲になったソシア空軍のパイロットたちには恐怖以外の何物でもないが、ソシア陸軍の兵士から見れば天使が飛び交っているように見えたかもしれない。

\*

レッド・エレファントは巨大だしコバルト・カウもイエロー・タイガーも通常の戦車と比べれば大型だ。しかし、この中央の凹にくぼみを持つハリネズミ、いやハリー・マウスは戦車と言ふよりは装甲車に近い。先ほど強力な攻撃を行った球体は何事もなかったように中央の凹みに収まる。無限軌道がガラガラと音を立てて前進し出すと砲身がないまん丸の砲塔が前後左

右に揺れる。

「ひよつとしてこのハリー・マウスが最強の戦車かもしれない」

榊が感心する。しかし、イリは無視する。

「とりあえず投降したソシア兵が無事で良かった。でもこの戦車も含めてノロじゃなくてウイ  
ルス族……地球に残ったグレーデッドの科学者たちが製造したとしたら、大変だわ」

榊が首をひねると加藤も首を傾げながら尋ねる。

「何が大変なのですか」

イリが半ば怒り出す。

「まだ分からないの！」

二人はきよとんとしてイリを見つめる。イリは勘の鈍い一人にどう説明しようかと思案する。

「ハリー・マウスといい、イエロー・タイガーといい、ユバルト・カウといい、レッド・エレ  
ファントといい、どれもノロが作ったと言われたら否定できる？」

「ノロの惑星で製造して時空間移動装置で地球に運んだのか」

「そうじゃないわ。恐竜やへびと戯れるノロにそんな余裕はないはず。と言うことはウイ  
ルス族が作ったとしか考えられないでしょ！」

「そうか！」

榊が同調する。

「考えても見なさい。ノロの惑星に同行したグレーデッドのメンバーはいとも簡単に宇宙戦艦やノロの箱船を造ったわ。宇宙最強の戦闘艦ブラックシャークも」

「どう猛なサメをモデルにした……」

「ノロについていかずに地球に残ったグレーデッドのメンバーが劣っているとは思えないわ」

「なんとなく分かってきた。とにかく彼らもすごい！」

「もし全員ノロと同じ天才だとしたら……」

加藤が小膝を何度もたたく。

「イエロー・タイガーを大量生産すればいいのにまるで手作りのように違ったタイプの戦車を造る。ハヤブサのような戦闘機を造ればいいのに戦車しか造らない……ように見える。まあ、そんなことどうでもいいわ」

「ノロの分身が何人もいることになれば中華民国のワクチン族への対応が心配だ」

イリが加藤の言葉を遮る。イリにとってこの加藤の発言は脇道につながつっていると判断した。だから言葉が少し乱暴になる。

「私が言いたいのは、単にノロのアイデアや設計を実用化するだけの能力、もちろんすごい能力だけど、そうじゃなくてノロと同じ発想、アイデアをウイルス族が持っているとしたら大変なことになる、と言いたいのに」

しばらく沈黙が続く。